



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」

Ver.2-034 号 (通巻 265 号)

「核大国の暴走を許さないために」

— 佐藤優神学部客員教授 —



毎年、終戦記念日（8月15日）の「同志社ファン・レポート」は同志社が戦争に関わるものをと考えている。今年は佐藤優神学部客員教授の講演を採り上げる。

先月7月27日、広島国際会議場で国際平和シンポジウム2019「核兵器廃絶への道」が開催された。（主催：広島市、広島平和文化センター、朝日新聞）

そこでの基調講演に同志社大学の佐藤優神学部客員教授が選ばれた。題は「核大国の暴走を許さないために」。

概要は、核軍縮は現実主義と理想主義、国家主義と国際協調主義の間で一進一退を繰り返してきた。その歩みを振り返り、「歴史の振り子を理想主義と国際協調主義の方向に戻さねばならない」と指摘し、「核大国の指導者に対話を促すことが重要だ」と。

<講演の要旨>

歴史は、振り子のように動く。現実主義と理想主義の振り子、国家主義と国際協調主義の振り子が交代のようにして動いている。

1970年、核不拡散条約（NPT）が発効した。背景には核廃絶を望む民衆や国家の声があった。振り子が理想主義と国際協調主義の方向に振れ、国際社会のコンセンサスが取れた。

核保有国には「誠実に核軍縮交渉を行う義務」が規定されたが、履行されたとは言えな

い。米ソ（米ロ）は核軍拡競争に走り、中国も加わった。振り子が現実主義と国家主義に傾いている時に核軍拡が行われる。

ただし、そうした国の指導者にも「このままでは破滅だ」という危機意識が強まり、核戦争回避に向けて勇気ある動きを示す。キューバ危機や中ソ対立における危機などをめぐり、指導者らの決断を過小評価してはならない。

大国の核独占に不満を持つ一部の国は核開発を進めた。しかし、NPTは効力を失ってはいない。多くの国はNPTを守り、核軍拡の歯止めになっている。

歴史の振り子を、理想主義と国際協調主義の方向に戻さねばならない。

アインシュタインは1947年の国連総会に送った公開書簡で、こう述べた。

「国家の軍備がどんなに強力なものであろうと、それはいかなる国家にとっても、軍事的な安全保障をつくり出してくれるものにはならず、また平和の維持を保証してくれるものでもありません」

この現状認識は、現在も有効性を失っていない。

非核保有国の指導者は、核大国の指導者に対話を促すことが重要だ。私たちは自国の指導者が対話に真剣に取り組むように働きかけていかななくてはならない。 (以上)

.....

その他に

▽特別対談「平和の砦を築きましょう」 大林宣彦さん、東ちづるさん

▽パネル討論 佐藤優さん、ボニー・ドチェルティさん、荊尾（かたらお）遙さん、黒澤満さん、コーディネーターは吉田文彦・長崎大学核兵器廃絶研究センター長

この討論で、佐藤優教授は、市民一人ひとりが首相か外相に手紙を書いて直訴するのが効果的だとして「そうすれば、首相官邸も何事が起きているんだと関心を持ち始める」との妙案で会場が沸いた。■

